

とうすけさん 笛をふいて!

香山彬子

絵 牧野鈴子



さん 笛をふいて!

香山彬子

絵 牧野鈴子



913

香山彬子

とうすけさん 笛をふいて！

講談社 1979

188p 22cm (児童文学創作シリーズ)

かやま あきこ

とうすけさん 笛をふいて！

昭和54年11月16日 第1刷発行

定 価 880円

著 者 かやまあきこ 香山彬子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

© Akiko Kayama 1979 Printed in Japan

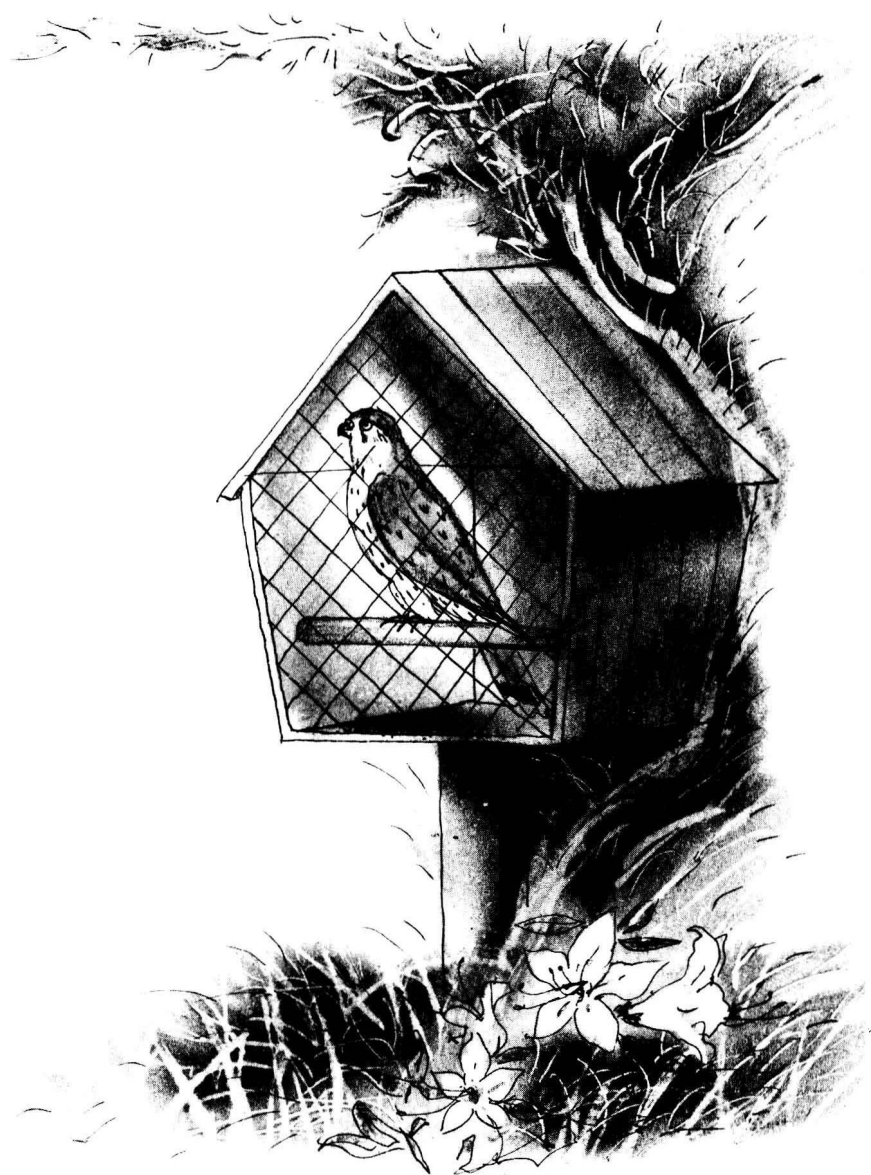
落丁本・乱丁本はおとりかえます。

8093-190013-2253 (0)

(児一)

とうすけさん
笛をふいて！

香 香
山 野
彬 鈴
子 子
作 絵



一わのチョウゲンボウよ。

公園の鳥箱とりばこのなかの、おまえを見たとき、

わたしは、なみだがあふれてしかたがなかった。

あるとき、おまえは、身みじろぎもせず、

かなしい目で、金かねあみごしに、じつと空を見あげていたね。

つばきをひろげて、どんなに、大空をとびたかつたろうね。

あれから、十年をすぎたいまも、

あのとらわれの、かなしげなおまえのすがたが、

わたしの目のおくにやきついたままだ。

おまえは、まだ生きているの？

それとも、死しんでしまったの？

わたしは、このごろ、毎日、

ルーマニアの笛ふえ、ナイのうたをきいているのだよ。

ナイがかなでるドイナドイナのうたは、

ものがないこの笛ふえの音色おんしきとともに、

わたしのむねのおくにしみとおり、

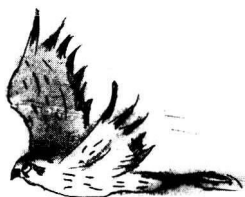
おまえのかなしみを、はつきりよみがえらせる。

ドイナは、まるで、おまえのかなしみのうたのようだ。

わたしは、ナイがかなでるドイナをききながら、

おまえに、このうたをささげよう。





もくじ

ツメクサの野原

8

チヨウゲンボウのこと

23

東助^{とうすけ}のねがい

35

すてきな双眼鏡^{そうがんきょう}

47

ふしぎなことが!

58

たいせつなひみつ

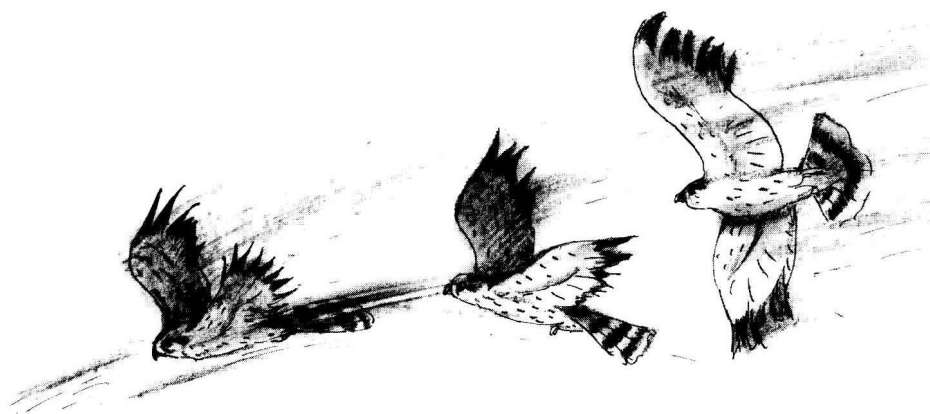
70

ツツジの花がさくころ

79

かなしいじけん

91



おわりに	188
大雪の夜 おおゆき	173
初雪の日 はつゆき	164
夏から秋に	152
岩田の公園で いわた こうえん	137
きえたきぼう	125
巣だちのころ す	113
チョウゲンボウの親子	104

とうすけさん 笛をふいて!



ツメクサの野原

岩田の里に、春がやってきた。

春がきたといっても、だるま山のツメクサの野原には、まだ、つめたい風がふいている。なのに、うす青い空は、はちみつ色の、まぶしい日の光にかがやいて、きょうは、あまく、とろりとした、あたたかいよい日だ。

東助は、だるま山のツメクサの野原に、こしをおろして、笛をふいている。

ピル　ピル　ピーララ

ピルル　ピルル

笛の音は、よくとおり、りとすんだ音色でうたう。

（ああ、きもちがいいなあ。ぼくのからだまで、笛になったみたい。）

ピル ピル ピーララ

ピルル ピルル

笛の音は、風にのって、どこまでもとんでいく。

東助の笛は、死んだおじいさんの、かたみの笛、ナイ。ナイは、ルーマニアの民族楽器のひとつで、音階順に木のつつを何本もならべてつくった笛だ。

東助は、おじいさんの友だちの、ニコライ先生に、小さいときから、この笛をならってきた。だから、東助は、まだ小学校の五年生なのに、とてもじょうずにふけるのだ。

東助は、べんきようがすきだ。でも、笛をふくのはもっとすきだ。それで、いつも、笛ばかりふいている。東助は、

（おとなになったら、ルーマニアに、この笛のべんきようにいこう。）
と、おもっている。

「いっしょけんめい、れんしゅうしなさい。おおきくなったら、ルーマニアのブカレストにある音楽院に、ナイのべんきようにいきなさい。きみはきっと、す

ばらしい笛ふきになるよ。」

ニコライ先生は、いつもそういつて、はげましてくださる。

東助は、ときどき、だるま山のツメクサの野原に、ひとりでれんしゅうにく。笛をふくときは、ひとりがいちばんいい。おもいきり、れんしゅうができるからだ。

こうして、野原でふいていると、笛の音を、風が空までとばしてくれる。

ピル　ピル　ピーララ

フルル　フルル

ツメクサの野原の、むかいがわにある、つつじ山のふちは、ふかくきりたったけわしいがけになっている。

がけの下には、すきとおった川の水が、空や雲をうつしながら、たっぷたっぷと流れている。これが、ちよがみ川だ。

この川ぞいの、けわしいがけには、せのひくい、ツツジの木がしげっている。五月になると、赤やむらさきや白のツツジの花が、がけいちめんにさきみだれ

る。

と、そこらは、ぱつと、あかるくようきになって、まぶしく、色とりどりに、かがやきはじめる。

花の色が、川面^{かわも}にかけをおとして、まるで、ちよがみをしいたように見える。うす青い春の空までがほんのりと、花の色にそまったように、見えることもある。

さきはこったツツジの花が、五月の風にふかれて、ぽたぽたと、川にちって流れはじめると、それは、まるで、色とりどりのちよがみを、こまかくちぎって、まいたようだ。

この川を、みんなが、ちよがみ川^{かわ}とよぶようになったのは、きっと、このためだ。

とにかく、この美しい風景^{ふうけい}は、ずうっと、むかしから、いまもかわらない。

「ちよがみ川^{かわ}の、がけのツツジは、もう、たくさん、花のつばみをつけたかなあ。」

東助は笛をふくのをやめて、むかいがわの、つつじ山のがけを、のんびりな
めて、うっとりする。

じっと、ながめていると、かげろうがたっているのか、がけのあたりが、ゆら
ゆらゆれて見える。

なにもかも、あたりいちめん、はちみつ色の日の光の下で、とけてしまいそ
うに、のんびりしたながめだ。

ヒバリが、うたいながら、遠くの空を、点になって、たかくたかく、のぼって
いった。

「そうだ！ もう、そろそろ、チョウゲンボウたちも、やってくるだろう。」

東助が、たのしそうにつぶやいた。

チョウゲンボウというのは、ハヤブサのなかまの鳥だ。だから、いさましい鳥
だけれど、その大きな黒い目は、すずしげで、とてもかわいらしい。からだの大
きさは、ハトぐらいだろうか。でも、尾ばねは長い。

春がきて、ヒバリがうたいはじめるころ、この岩田の里には、二十くみほどの

チヨウゲンボウのつがい、とんでくる。そうして、つつじ山の、きりたった
びょうぶのような、がけの岩のくぼみに、それぞれ、巣をきめて、たまごをう
み、ひなをかえして、そだてるのだ。

そのひなは、まっ白なうぶ毛につつまれて、かわいい大きな黒い目をしてい
る。

チヨウゲンボウたちは、このあたりに、たくさんいるハタネズミやアカネズミ
を、とってたべるから、岩田の里の人たちは、この鳥をたいせつにしている。そ
して、いまは、天然記念物の保護鳥となった。

東助は、チヨウゲンボウのことを、あれこれと、かんがえながら、ツメクサの
上にねころんだ。

つめたいけれど、きもちのよい風が、はちみつ色の日の光を、野原にまきちら
しながら、ふきすぎていく。

春のうす青い空には、東助の笛の音が、まだ、かすかに、なりつつづけているよ
うだ。

（もう、すっかり春だなあ。なんて、いいきもちだろう。）

東助は、草の上でうとうとする。まわりのものが、なにもかも、光のなかで、かげろうのように、ゆれている。

と、話し声がきこえてきた。

（だれか、近くにいるのかな。）

東助は、ツメクサのなかで、じっと、耳をすます。

「ほら、ほら、見て！　むこうの空を、ヒバリが、まっすぐおりていくわ。」

かわいい女の子の、はずんだ声がした。

「あ、おりていく、おりていく。ヒバリは、ちよがみ川の、むこうがわのはたけのなかに、おりたんだね。」

と、かわいい男の子の声。

東助は、すこし、頭をもたげて、声のしたほうを見た。

東助から、すこしはなれたところに、野バラのしげみがある。

そのしげみのまえで、かわいい男の子と女の子が、足をなげだして、かたをよ